# 世界を変えよう基金報告書

## マングローブ植林による少数民族チャム族への経済的・文化的支援

筑波大学社会・国際学群
社会学類４年　石原亜里沙

3月18日～3月24日までの一週間、カンボジア南部・カンポット郊外の漁師の村で、マングローブの植林を行った。イスラム教を信仰する少数民族チャム族と共に生活し、彼らの経済的支援および文化交流をすることができた。

まず、マングローブを植林するにあたり、マングローブの種を収集する作業を行った。船で海へ移動しマングローブから種を採取。種は花のような形でとても美しく、集めがいのあるものだった（※写真１）。袋がいっぱいになったところで再び船に乗り、村に持ち帰った。次に、村で苗の土台となる泥を作った。木の棒と大きな桶のような専用の道具で泥を濾し、細かく分けて苗入れに入れた。肥料となる泥は特殊で、普通の泥よりもどす黒く粘着性のあるものだったため、目に入ると危険を伴うと感じた。次に、6ヶ月育ったマングローブを村の畑から海へ植え移す作業を行った。船で海を渡り、支柱が備わっている浅瀬に向かう。到着後は支柱の直下に足で深い穴を開け、その穴にマングローブを植えた。細いロープで支柱とマングローブをつなぐことで、嵐の時に波で流されるのを予防することができた。この作業を繰り返し行い、合計で735本のマングローブを植林するころができた。また、生活を共にした村全体でツアリズムとしての施設を運営していたため、その施設に新たな梯子を作ることでも、彼らへの持続的開発に貢献できた（※写真２）。使われなくなったバンガローを解体し、その木材を持ち帰り、現在の施設に必要な梯子を建設した。梯子の先にはゴミ置き場を設け、施設の清潔さと顧客の満足度を保つための手助けをすることができた。

その村の村長によると、1本のマングローブで4人の漁師の生活を支えられるという。1本あたりの寿命が100~200年であり、現在だけでなく次の世代の漁師にも影響を与えることができるからである。そのため、現在および次世代に渡り合計で漁師2940人に持続的経済支援を行うことができた。カンボジアの平均家族人数が5人であることを考え、さらにその収入が彼らの家族にも影響を与えると14700人の人々の生活を支えることに貢献した。現在、カンボジアでは総人口の4%、約40万人のチャム族が暮らしている。彼らは17世紀頃まで存在したチャンパー王国の末裔であり、ベトナム南部およびカンボジア南部に多い。20世紀後半にポル・ポト政権下のクメール・ルージュにより、ムスリムが激しい迫害を受け、民族の人口、特に知識人の数は少ない。こういった状況で独自にコミュニティを作り、自給自足で生活しているため、今回の経済的支援は彼らにとって貴重な、そして重要な機会となったと考えている。また、少数民族のチャム族の経済を支えることで、その文化も支えることができ、文化的マイノリティの継続およびダイバーシティの維持にもつながる活動ができた。

今後の課題としては、こういった独自のコミュニティで経済を回していく難しさがある。今回は地元のNPOと協力しひとつの村の援助を行うことができたが、ネットワークのない村はそういった支援を受けられない。独自の文化を維持していく必要がある一方で、村の外、他の文化圏の人々との交流や協力も、民族が継続的に繁栄していくために欠かせないだろう。